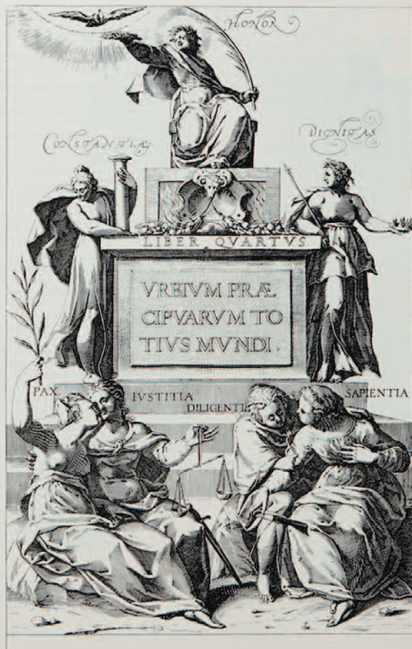
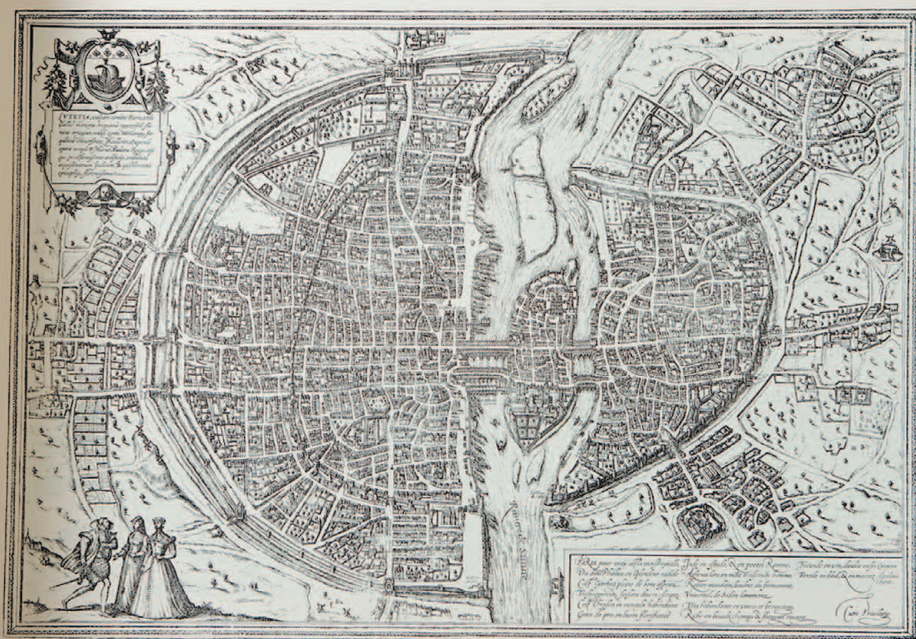




図書館報

SEINAN GAKUIN
UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN
2011.October No.171



世界の図書館 フランス編

1 「危機と統合」

図書館長 尾上 修悟

2 研究ノートから

新たな学問「リスク学」 商学部 商学科 教授 小川 浩昭

ブラウジングルーム

筑豊地方の炭坑を描く 人間科学部 社会福祉学科 准教授 大西 祥恵

3-4 世界の図書館 フランス編

エクス=マルセイユ第3大学図書館 法学部 法律学科 准教授 横尾 亘

フランス国立図書館 文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授 テイエリー トリュベール

5-6 使ってみようシリーズ(14)

EU情報センター(国際機関資料室) 図書情報課 相田 英美子

7 蔵書ギャラリー no.12

『16世紀 世界都市図集成(全2巻)』

経済学部 経済学科 教授 花田 洋一郎

欧州経済統合は、周知のように、第2次大戦後まもなくの時期に開始される。それはまず、J.モネの提唱に基づいて、1951年の「欧州石炭・鉄鋼共同体」という形で実現した。([6])この共同体がなぜ生れたのか。我々はここで、その歴史的理の持つ重みを銘記する必要がある。それは確かに、その後の経済統合の出発点として位置付けられる。しかし他方で、そうした共同体は、経済的利権をめぐる展開されてきた諸国間の激しい争いの終点をも意味した。実際に、フランスとドイツの間を中心に、共同体の拠点であるアルザス・ロレーヌ地方の利権獲得のため、約1千年にわたる闘いが欧州でくり返されてきた。それゆえ、この共同体の設立は、言わば欧州における1つの平和宣言でもあった。

それから半世紀以上を経て、欧州経済統合は破竹の勢いで進められてきた。先の共同体の設立を計画したR・シューマンが、「ヨーロッパの全体の建設は、まず団結を生み出すことで具体的に実現される」([3])と述べたように、シューマン・プランは、経済的プラグマティズムを強めた。ここで主だった統合の具体例を示すと、それらは、1958年の「欧州経済共同体(EEC)」を皮切りに、1979年の「欧州通貨システム(EMS)」、1989年の「経済・通貨同盟(EMU)」等に及ぶ。そして、1992年のマーストリヒト条約の締結を経て、ついに、欧州の人々にとって1つの悲願であった単一通貨が、「ユーロ」という名称で1999年に誕生した。([2])このユーロこそがまさしく、かれらの眼には、未来に輝く星の如くに映ったはずであった。

ところが今日、そのユーロの存続が脅かされている。ひいては、欧州同盟(EU)そのものでさえ、その存立が危ういのではないかと疑われている。果して、ユーロとEUは、このまま瓦解してしまうのか。このことが、今こそ真剣に問われているときはない。2007年から始まったグローバル規模での金融危機は、確実に欧州を直撃した。この危機が、フランス最大の銀行の経営問題から発したことは、その点を端的に物語る。さらにその後も、1年毎に大きな危機が現れ、ついに2009年には、ギリシャの財政危機に基づく、国家破綻の危機(ソブリン・リスク)に達する。一応、ギリシャに対する一層の金融支援が決定され、そのデフォルト(債務不履行)は避けられた。もしデフォルトが起こっていたら、それは、先進国で初めてのケースとなるものであった。しかし、ユーロやEUの危機的状況が完全に去った訳ではない。

経済的な観点から判断すれば、今回のギリシャ危機に代表されるユーロ圏の債務問題は、もはや、解決することは不可能ではないか。このように論じる経済学者やアナリストは、内外を問わず少なくない。この考えは確かに、経済の論理のみに着目すれば、一つの見方を表している。しかし、これまでの統合による欧州建設は、経済やビジネスの点でのみ推進されてきたのでは決してなかった。この点を忘れるべきではない。出発点となった欧州石炭・鉄鋼共同体も、戦争を2度と経験したくない、という願いを含むものであった。さらに言えば、ユーロでさえ、単なる通貨という枠組を越えた、1つの社会的・文化的な集結としての象徴と見ることもできる。([8])だとすれば、今回の大危機も、経済以外の政治・社会・文化等の領域を視野に入れながら、総合的見地に立ってその打開に向けた対策を考えることができるのではないか。振り返って見ると、欧州統合は、危機の度に、それを乗り越える形で進められてきた。事実、欧州通貨システムは、第2次オイルショック後に、また、経済・通貨同盟はバブル崩壊後に、そしてユーロは、アジア通貨・金融危機後に、各危機への対応の中でつくり出された。まさにモネがかつて語ったように、「危機にこそ欧州は進歩」した。現在直面している危機に対し、EUはすでに新たな団結の道を探っている。([1][4][7])それが、あの文豪V.ユーゴが強く訴えたように、([5])欧州の各国が別々の存在意義を確保しながら団結するという精神を表す限り、かれらは再び危機を打開し、真の統合に向けた新しい道を歩むに違いない。そう願うのは私1人ではないであろう。

(参考文献)

- [1] 田中素香著『ユーロ：危機の中の統一通貨』岩波書店、2010年
[開架2階 092/338/25B]
- [2] Dévoluy, M., *Les politiques économiques européennes*, Seuil, 2004
- [3] Marie-Annick Barthe, *Économie de l'Union européenne : manuel*, Economica, 2000
- [4] Le Cercle des économistes ; sous la direction de Pierre Dockès et Jean-Hervé Lorenzi, *Fin de monde ou sortie de crise?*, Perrin, 2009 [開架 338/9/530]
- [5] Hen, C. et Leonard, J., *L'union européenne*, La découverte, 2003
- [6] Pascal Kaufman, *L'union monétaire européenne*, Presses universitaires de Bordeaux, 2008 [開架 338/97/162]
- [7] Jean-Yves Letessier, Jacques Sivano, Robert Soin, *L'Europe économique et son avenir*, Armand Colin, 2008 [開架 332/3/219]
- [8] María Lorca-Susino, *The euro in the 21st century : economic crisis and financial uproar*, Ashgate, 2010 [開架 338/97/159]

新たな学問「リスク学」

商学部 商学科 教授 小川 浩昭

東日本大震災により被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。この未曾有の大震災は、地震リスク、津波リスク、原子力リスクが一気に顕在化した複合的な大災害といえます。特に原発事故を見ますと、人間の英知で十分コントロールできていると思っていたものが、コントロール不能に陥り、制御不能なモンスターを生み出していたのではないかと恐怖さえ感じます。

本来科学的進歩を含む世の中の進歩は、合理化を進展させ、予測可能性、確実性を強化するはずですが、逆に計算不能なリスクを生み出し、リスク溢れる社会としてしまっているのかもしれない。大変残念なことに、現代社会をリスク溢れる「リスク社会」と呼ぶことに違和感のない状況にあると言えます。リスク社会化への予言の書とも言えるべき書物がチェルノブイリ原発事故の年に出版されています。ドイツの社会学者ウルリヒ・ベックの『リスク社会』¹です。

もともとリスクという用語は、リスクを処理する保険について研究する保険学で研究されてきました。経済学でも大きく取り上げられ、保険学・経済学を主流として研究されてきましたが、先のベックの著作を契機に社会学でも考察されるようになり、それ以外の様々な分野でも取り上げられるようになりました。リスクが学際的な用語として重

要となってきたといえます。そこで、リスクに関する学問「リスク学」を構築すべきとの動きも出てきました。代表的なものとして、岩波書店の『リスク学入門』シリーズがあげられます²。このシリーズはリスク学構築に向けた地ならしを目的としているといえ、現在でもリスク学という学問が構築されたとは言えません。しかし、地球環境問題一つを取ってみても、リスクを真正面に据え、人類がどのようにそれに向き合うかを考えなければならないと思います。したがって、リスク学を構築すべきなのでしょう。

私の専門の保険学は、リスク研究の本来本元といえるにもかかわらず、他のリスク関連の学問領域からほとんど無視されています。リスク学構築に向けた保険学の学際的な貢献が保険学の再生の道ではないかと考え、研究を進めています。

- 1 ウルリヒ・ベック著、東廉、伊藤美登里訳『危険社会：新しい近代への道』法政大学出版局、1998年〔開架3階 304/0/704〕
- 2 橋本俊昭〔ほか〕編『リスク学とは何か』岩波書店、2007年〔開架3階 301/0/105-1〕
橋本俊昭編『経済からみたリスク』岩波書店、2007年〔開架3階 301/0/105-2〕
長谷部恭男編『法律からみたリスク』岩波書店、2007年〔開架3階 301/0/105-3〕
今田高俊編『社会生活からみたリスク』岩波書店、2007年〔開架3階 301/0/105-4〕
益永茂樹編『科学技術からみたリスク』岩波書店、2007年〔開架3階 301/0/105-5〕



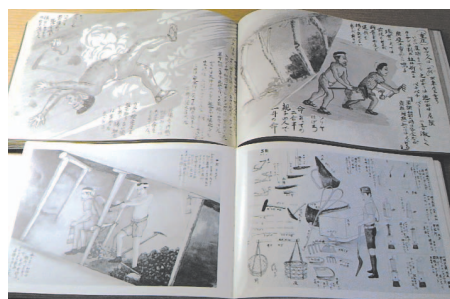
ブラウジングルーム

筑豊地方の炭坑を描く

人間科学部 社会福祉学科 准教授 大西 祥恵

すでに報道などを通して、今年5月にユネスコの世界記憶遺産に筑豊地方の炭坑を描いた山本作兵衛の絵画や日記が登録されたのをご存じの方は多いのではないのでしょうか。日本国内の作品が世界記憶遺産に登録されたのはこれが初めてとのことで、作兵衛の作品を展示している田川市石炭・歴史博物館にも作品を見ようと、たくさんの方々を訪れているといえます(注1)。

そんな作兵衛の作品は、印刷された形ではあるものの、西南学院大学の図書館でもみることができます。そこで今回のブラウジング



グループでは、図書館5階の貴重書庫に所蔵されている『明治大正炭坑絵巻』と『筑豊炭坑絵巻』を紹介したいと思います(注2)。

2冊の『絵巻』には、いくつか同じ作品も含まれていますが、いずれも当時の筑豊地方における炭坑労働者の姿がさまざまな側面から描かれています。「先山」、「後山」の二人の人物が一緒になって暗く狭い坑道で従事していた厳しい労働の実態はもちろんのこと、その際に使用したさまざまな道具やその名称、落盤事故の被害、炭坑内部の見取り図、一日の作業が終わってからの風呂の様子、「炭住」

と呼ばれた労働者の住宅、炭坑の町に訪れた行商人や旅芸人の姿、盆踊りなどの年中行事、子どもたちの通学や進学の状態など、筑豊地方の炭坑で働く人々の労働や生活のありとあらゆるシーンを描き出そうとしたかのようにみえます。

父親である英信とともに、長年交流のあった上野朱氏によると、作兵衛は「十二歳で鶴嘴鍛冶(つるはしかじ)に弟子入りした後、十四歳からは後山として坑内に下がり、その後のほとんどを筑豊の炭坑で過ごした根っからのヤマの人だった」といいます(注3)。そして、孫たちに伝えたいという一心で六十歳を過ぎてから画を描き始め、九十二歳で亡くなるまでに千枚を超す作品を残したそうです。

このたび記憶遺産に登録されたのは絵画や日記なのですから、何よりも実際の作品に触れることが大切なのは明らかです。しかし、作兵衛の作品は画の中に詳細な説明文などが書き込まれています。そのため、そうした文章をじっくりと読んでみるために、まずは画集をひもといてみてはいかがでしょうか。

ちなみに5階の貴重書庫の資料は、1階のカウンターで手続きすれば閲覧が可能です。

- (注1) 『朝日新聞』(2011年5月31日)
- (注2) 山本作兵衛画、明治大正炭坑絵巻刊行会編『明治大正炭坑絵巻』1963〔貴重書 567/021/5 禁帯出〕
山本作兵衛画、山本作兵衛著『筑豊炭坑絵巻』葦書房、1973〔貴重書 567/021/9 禁帯出〕
- (注3) 上野朱著『父を焼く：上野英信と筑豊』岩波書店、2010〔開架 914/6U45/4〕

世界の図書館

〔フランス編〕



エクス＝マルセイユ第3大学図書館

Bibliothèques Universitaires d'Aix-Marseille 3 (Université Paul-Cézanne Aix-Marseille 3) : 3 avenue Robert Schuman 13628 Aix-Provence cedex 1
<http://flora.univ-cezanne.fr/flora/servlet/LoginServlet>

法学部 法律学科 准教授 横尾 亘

私は、2009年9月から2010年8月まで、本学の協定校でもあるエクス＝マルセイユ第3大学（通称ポール＝セザンヌ大学、Université Paul-Cézanne Aix-Marseille 3）において客員研究員として在外研究をしていたため、本稿ではエクス＝マルセイユ第3大学の図書館についてご紹介させていただこうと思う。しかしながら、エクス＝マルセイユ第3大学における図書館は本学の図書館と形態を異にするため、若干の説明が必要であろう。

エクス＝マルセイユ第3大学は法学・経済学の教育・研究を目的とする大学であり、大学本部・法学部・経済学部などの主要な組織はエクサンプロヴァンス市（以下「エクス市」）内の本部キャンパスに所在している。しかしながら、第3大学はフランス南部最大の都市であるマルセイユ市にもキャンパスを持っていることから、エクス市内のみならず、マルセイユ市内にもいくつかの図書館を配置している。

具体的に言うと、エクス＝マルセイユ第3大学の図書館（Bibliothèques Universitaires d'Aix-Marseille 3）は一つではなく、いくつかの図書館から成り立っている。たとえば、総合的な図書館としては、①「シューマン法学および経済学図書館（Bibliothèque Universitaire Droit & Economie Schuman）」、②「モンペラン社会科学および法学図書館（Bibliothèque Universitaire Sciences & Droit Montpellier）」、③「サポルタ（Bibliothèque Universitaire IEFEE-IMPGT Saporta）」、④「サン＝ジェローム社会科学図書館（Bibliothèque Universitaire Sciences St Jérôme）」、⑤「カスピエール法学および経済学図書館（Bibliothèque Universitaire Droit et Economie Canebière）」などがある。①はエクス市内のロベール・シューマン通りに面した本部キャンパスに、②はエクス市内のモンペラン・キャンパスに、③はエクス市内中心部のサポルタ通りに面した旧キャンパスに、それぞれ設置されている図書館である。また、④および⑤はそれぞれマルセイユ市内に所在するキャンパスにそれぞれ設置されている図書館である。ただし、多くの一般学部生は本部キャンパスで学ぶことになるため、一般学部生にとっての図書館といえば、本部キャンパスに存在する①「シューマン法学および

経済学図書館」のことを指すようであり、蔵書数・閲覧座席数も他の図書館に比べ圧倒的に多い。

なお、この他のエクス＝マルセイユ第3大学に設置されている研究所等に附置されている図書館あるいは図書室として、⑥「政治学院図書館（Bibliothèque de l'IEP）」、⑦「国際および共同体研究・教育センター図書館（Bibliothèque du CERIC）」、⑧「私法図書室（Salle de Droit privé）」、⑨「公法図書室（Salle de Droit public）」、⑩「比較法センター図書室（Centre de Droit Comparé）」などがある。これらの図書館・図書室は、主として当該学院・研究所に所属している教員・研究員・大学院生・大学院生を対象としたものであり、蔵書についても一般的な教科書等のみならず専門的な書籍・雑誌等が配架されている専門的な図書設備である。しかしながら、一般の学部生であってもそれぞれの図書館・図書室の利用可能な時間帯においては許可を得て利用することができる。

①の「シューマン法学および経済学図書館」の蔵書数は、著書30万冊（うち開架2万3000冊）、官報・雑誌等の定期刊行物650タイトル（うち開架480タイトル）であり、閲覧座席数は523席であるが、閲覧座席数が少ないため、学習熱心な学生たちが日々混雑しているのが実情である。また、パソコンの設置台数が非常に少ないため、多くの学生たちは私物の



〔「シューマン法学および経済学図書館」閲覧座席の風景〕

パソコンを図書館内に持ち込んで学内LANにつなぎ、それによって学習活動を行っているようである。なお、フランスの学生たちは開架書籍についてコピーをするということはあまり多くなく、書籍の内容を自分のノートに手書きで書き写すことが多いようであった。

「シューマン法学および経済学図書館」では、カードによる入館管理等を行っておらず、自由に出入りすることが可能である点も特色として挙げられよう（もちろん私のような客員研究員＝学外者は、入館許可証明書を常に携帯し、求めがあった場合には提示する必要があるが、在外研究中において一度も提示を求められたことはなかった）。館内でのおしゃべり等についても比較的寛容であったような印象である。フランス的あるいはフランス南部的なおおらかさと言えなくもない。

〔次ページ・文中写真〕齋藤芳浩先生撮影



〔シューマン法学および経済学図書館〕



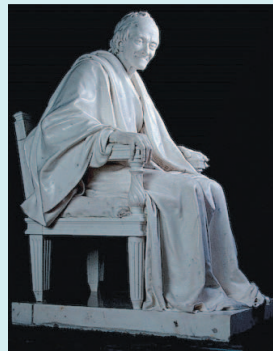
〔François Mitterrand site〕 Photo by Garance Bailly

Bibliothèque nationale de France

Richelieu site: 5 rue Vivienne 75002 Paris <http://www.bnf.fr/fr/accueil.html> François-Mitterrand site: Quai François Mauriac 75013 Paris

文学部 外国語学科 フランス語専攻 教授 ティエリー トリュベール

When entering the reception hall of honor of France's National Library, one is first welcomed by Voltaire (in his dressing gown!) and cannot escape the impression that this intellectual figure dominates the place, which contains France's most precious books as well as its largest number. Indeed the French Enlightenment philosopher belongs to the century that witnessed the library's move to the first rank among all royal libraries in Europe. This was achieved thanks to the abbot Bignon who gave the library all its splendor by organizing it into five departments: Manuscripts, Books in Print, Titles and Genealogies, Engravings on Plate and Wood, and finally Medals and Engraved Stones. It was during the eighteenth century when Bignon was a librarian, but not just any librarian: he was librarian for Louis XV, King of France and Navarre. During Bignon's twenty-five year tenure in the position, not only did he acquire important academic documents, as did his predecessors, but he also succeeded in obtaining them from eminent scholars from all over Europe. Bignon granted those scholars full-time access to the Royal Libraries and even allowed the general public in, half a day per week, thanks to the 1720 Act, ordered by the king only one year after Bignon's appointment as librarian. Then in 1721 he insisted on gathering the entirety of the king's collections into one single building, now known as the "Richelieu site".



Voltaire seated
Statue by Jean-Antoine Houdon

{ BnF Bibliothèque nationale de France



〔Reading Room, Richelieu site.〕 Photo by Zubro

The abbot Bignon had acceded to this prestigious librarian post some 350 years after the creation of the first royal library by Charles V the Wise. In 1368, Charles V decided to gather 917 manuscripts into a single tower of the Louvre Palace. During this three and a half century period, two kings should be particularly remembered: Louis XI for founding a perennial library for the country's dynasty, and Francis I for creating the system of legal deposit in 1537, according to which printers were ordered to give the library one copy of any new

book printed and sold in the kingdom; the new law was a decisive step to the creation of the National Library.

In the same square, between rue Vivienne and rue Richelieu, the new National Library (now called the "Richelieu site") was built in the nineteenth century with modern materials from the industrial age; it replaced the old stone buildings. The much larger Bibliothèque nationale then allowed more room for the ever-increasing number of books, as well as visitors to its precincts. In the second half of the twentieth century the acquisitions grew to such a point that the library could no longer accommodate them, nor the growing number of scholars who wished to study in the grand oval reading room. The reading room's illustrious rows of wooden tables and green lamps were adequate for only 200 readers.

In 1989 the French President chose a new site for the expansion of the suffocating National Library, hence the name "François Mitterrand site". The old and the new sites were to be linked by an entirely new automated subway line (# 14), crossing Paris and the Seine. As a symbol of their unity, the two sites together became the new Bibliothèque nationale de France. The facility can now accommodate the digital data of the century as well as the ever-growing number of books and journals; it also follows an active digitization program: one million books to the day.

Four open book-shaped glass towers contain the library's 14 million books while two lower central floors, one for study and one for research, can accommodate 3314 readers, as well as visitors to various exhibitions and concert halls.

The four enormous glass buildings offer ample space for contemporary artists to make various interactive lighting installations and projections every year, especially at night during the popular and quintessentially Parisian "White Nights" events. For example in 2002 the towers were luminously transformed into the famous Mona Lisa or a ludicrous and stylized Maneki-neko.

Seven hundred years ago an illustrious French King used one of his palace's towers for the preservation of his precious manuscripts; nowadays the French people party around four pretty towers at night, somehow forgetting what it is all about: reading the precious books kept within.

EU情報センター(国際機関資料室)

西南学院大学図書館には、広く一般の方々にEUについての資料(または情報)を提供する拠点となる「EU情報センター」があります。

2011年4月よりEUIJ九州^(※)がスタートし、関係者にも広く利用されています。

今回は、そのEU情報センター(とそれを含む国際機関資料室)について紹介します。

※EUIJ九州とは

EUIJ (EU Institute in Japan)は日本でのEU研究のための学術拠点です。EUIJは欧州委員会(EUの行政執行機関)から補助金を受けています。日本には現在(2011年秋)、4箇所(東京[2]、関西[1]、九州[1])あります。EUIJ九州は九州大学、福岡女子大学、西南学院大学の3つの大学から成るコンソーシアムにより運営されています。詳細はEUIJ九州のホームページ(<http://www.euij-kyushu.com/>)をご覧ください。

1 どんなところ (何が利用できるのか)

EUに関しての法令・政策・統計などの情報を入手することができます。資料がある場合は借りるかまたはコピーをすることができます。ない場合も、代わりになる資料(情報)を担当の職員からアドバイスします。EUの公式サイトやオンラインデータベース(法令、統計)を使つての情報の探し方・入手方法についても知ることができます。

EU情報センターは、EU(欧州連合)が研究・広報のために発行した資料(または情報)を提供する情報拠点です。世界中に約500のEU情報センターがあります。日本国内には19の大学に設置されています。九州では西南学院大学のみです。各地域に1つを目安に置かれていて、沖縄は琉球大学、中・四国は福山大学に設置されています。

2 いつ利用 できるのか



月～金 9:00 - 20:00

土 9:00 - 17:00

* 日・祝日は利用できません

* 定期試験、長期休暇中は利用時間が短くなります。

詳しくは図書館ホームページ(<http://www.seinangu.ac.jp/library>)を確認してください。

3 どこにあるのか



1 入館ゲート



2 階段をあがる



3 階段をあがり2階に行く
(頭上に案内板がみえる)



4 左手をみると国際機関資料室の入口が見える

EU情報センター マメ知識

Q: EU情報センターはいつからあるの?

A: 1969年から。日本ではいちばん最初に開設されました。

Q: なぜ、西南学院大学にできたのか?

A: 国際情勢を的確に把握するためには、ECの諸事情を知る必要がありました。しかし、当時(1969年)、国内では国立国会図書館でしか利用ができませんでした。そこで、当時、図書館長であった坂本先生がECの担当部署に書面でEC関係資料の送付を申請したのがきっかけです。

1968年には国連の寄託図書館にもなっており、その後、OECDの協力資料館(1975に寄託制度はなくなったが、資料は継続して購入。)にもなり、国際資料の専用の部屋として、現在は「国際機関資料室」としています。

4 誰が利用できるのか



西南学院大学の学生、教職員

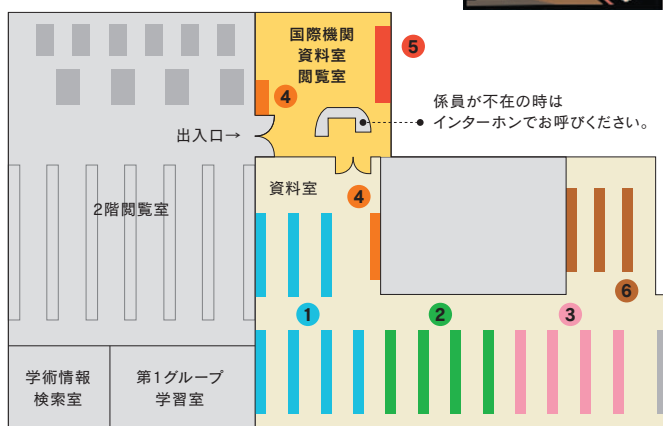
* 学外の方も利用可能です。利用の際は、入口横にあるインターフォンで「EU情報センターの利用をしたいことを伝えてください。」



5 どうやって利用できるのか



資料配置図(図書館2F)



- ① 国連図書・雑誌
- ② EU図書・雑誌
- ③ OECD図書・雑誌
- ④ 国際協力関係資料
- ⑤ 国連・EU・OECD新着雑誌
- ⑥ 国連公式資料・ドキュメント

直接来ることができなくても、電話、FAX、メールでEUに関する資料・情報について問い合わせることができます

(回答は担当職員がいる月～金 9:00-17:00[祝日を除く]にいたします)



閲覧室は開いている時はいつでも利用できます。

ただし、資料室は
1階カウンターで
受付をしてください。



検索用PCを使いたいとき、
質問をしたいのに
職員がいないときは、
インターフォンを使って
呼び出してください。



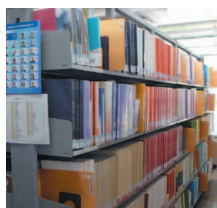
電話: 092-823-3410

FAX: 092-823-3480

E-mail: lib-koku@seinan-gu.ac.jp

6 どんな資料、サービスが利用できるのか

●EUが発行した公式資料(官報、条約、報告書、判例、統計資料)や各種政策分野の広報資料



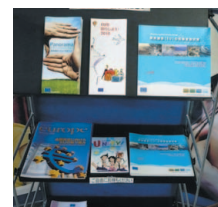
[よくある質問]あるEU法の原文が見たい、法律の制定過程の文書が見たい、判例が見たい、EUの統計データ(例えば各国のGDP等)が見たい。

●EUの資料を探すためのデータベース(オンラインデータベースのため、検索用PCで利用してもらいます)

●EUに関する日本語の資料(国内で発行された関係の本を揃えています)



●EUの発行したパンフレット等



*一部は1階の雑誌コーナー横に専用のパンフレット台を置いて配布しています

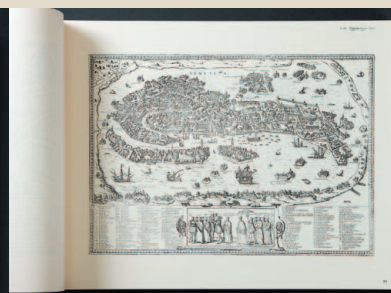
『16世紀 世界都市図集成(全2巻)』

Georg Braun and Frans Hogenberg, *Civitates Orbis Terrarum*, 6 vols, Köln, 1572-1617. 復刻版: 柏書房、1994年 全2巻[開架 290/18/5-1,2 禁帯出]

ロンドン



ケルン



ヴェネツィア

ケルンの聖職者G.ブラウン(1541~1622)と彫版師F.ホーヘンベルフ(1535~1590)による『世界都市図集成』は、1572年にケルンで第1巻が刊行され、第6巻が1617年に刊行され完結した。本作品は、収載された都市の説明がラテン語でなされ、平面図、鳥瞰図あるいは俯瞰図で作成された546ものヨーロッパ主要都市の展望地図を含んでいる。その中には最古の都市図も多く含まれており、歴史的史料価値はきわめて高い。ブラウンがこのシリーズの編集者であり、メヘレン出身のホーヘンベルフとシモン・ファン・デン・ネーフェルが重要な彫版師であった。彼らは既存の地図に基づきながら、またヨーロッパ中の都市を旅したアントウェルペン商人フフナーヘル父子やニュルンベルク書籍商カイモックスなど100名を越えたと推定される協力者から都市景観のスケッチを得て、現在伝来する都市図集の中でも最も独創的で格調高い作品に仕上げた。『世界都市図集成』は何度も版を重ね、日本では柏書房から復刻された。

収録された都市図の地理的分布は、20~25%がドイツ、15~20%がネーデルラント、10~15%がイタリア、10%以下がスペイン、ポルトガル、フランス、北欧、東欧・ロシア諸都市となり、イギリスはアジア、アフリカ、アメリカと同じく5%以下となっている。ドイツの中でもライン川下流域の景観が特に多く、またネーデルラント諸都市がそれに続くのは、編者の意向が強く働いているからであろう。イギリスの収載数が少ないことは、イギリス都市の発展が中世後期に衰退し16世紀にはまだ回復していないこと、また中世イギリス都市のおよそ80%は建設都市で

あり景観の歴史(立地に強い歴史性を持つ司教座都市キヴィタス、英語でシティは交通の要衝や街道沿いに置かれた)が浅いこととも関係しているのかもしれない。

表紙にあるのは第4巻の口絵(タイトルには全世界の優れた諸都市の第4巻とある)と16世紀パリの古地図である。1530年頃のパリで、通称「3人物の地図」である。セヌ川の中洲に浮かぶシテ島を中心に、同心円状に都市の拡大が見て取れる。12~13世紀に構築されたフランス王フィリップ・オーギュストの市壁西端(地図ではシテ島の左下)にはルーヴル城塞(現在のルーヴル美術館)がある。この市壁を囲む14世紀後半に構築されたシャルル5世の市壁東端(地図では12時の方向)には、バステューユ城塞(フランス革命以前のバステューユ監獄で現在のバステューユ広場)がみえ、セヌ川の上下流から侵入する敵に睨みをきかせていた。地図中にはシャルル9世時代の衣装を身にまとった3名の人物(2人の貴婦人に挨拶をする1人の貴族)が描かれていることから「3人物の地図」と呼ばれる。

本文上部に掲載されているのは、同じく本書に収載されているロンドン、ケルン、ヴェネツィアの16世紀後半の古地図であり、ロンドンのそれはその中世の姿を描いた最古の地図の一つである。古地図にはそれぞれの都市の歴史や個性がはっきりと刻印されており、何よりも驚くのは今でもこれらの地図を手懸りに都市散策が可能であることだろう。ヨーロッパの都市は何よりも景観を大事にし、描かれた建物や通りの一つ一つに命が吹き込まれている。都市図は我々を悠久の歴史の旅に誘うタイムマシンのようなものかもしれない。

編集後記

暑い夏が過ぎ去り、本当に涼しくなりました。天高く…、秋ですね。馬と一緒に肥えないように、読書に勤しむ毎日です。学生の皆様もぜひ図書館へお立ち寄りください。素敵な1冊に出会えるお手伝いをいたします。今号の世界の図書館はフランス編です。これまでヨーロッパ、アメリカ、アジア、オセアニアとお届けしてきましたがいかがでしたか。そろそろ新企画も検討中です。次号もぜひお楽しみに。

(D.Y)

西南学院大学図書館報 No.171

2011(平成23)年10月31日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511

福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<http://www.seinan-gu.ac.jp/library/>